

英文学に見る「月」

北 澤 義 弘

このようなテーマは英文学の研究題目としては珍しいものであろう。然し日本文学に扱われる月を念頭に置いた場合その一つの対比として考えてみるのも興味あることである。我が国の文学にあって月は日本人の日常の心

情に微妙な係わりをもって結び付いている。和歌、俳諧、散文に巧みに採り込まれ、機微な心情の表現に重要な役割を荷っているのではないだろうか。これは対し筆者が接したことのあふイギリスの文学作品では如何なるものであろうか。ここで全作品を網羅することは到底出来ぬことであるので、この結論が総てと思われてはならない。

先ず接した一番古い文献は十世紀のものである。The Exeter Book と呼ぶ Early English Text Society に収録された古英語の Riddle 39. である。これは文学作品とは言えぬまでも、昔の人々の遊びとして文書に残った有

名な記録なので参考までにここに記載してみる。最初が古英語で、その後に掲載したのがその現代英語訳である。平易なのでここではあえて和訳は省略する。

(古英語)

GEwritu secgað þæt seo wiht sy
mid monecyne miclum tidum
sweetol ond gesyne sundorcreaft hafað
maran micle þonne hit men witen
5 heo wile gesecan sundor *æghwylcne
feorhbrendra gewited eft feras on weg.
Ne bið hio næfre niht þær opre
ac hio sceal wideferh wreccan laste
hamleas hweorfan no þy heanre bip.
10 ne hafað hio fot ne folm ne æfre foldan hran

ne eagea ægper twege
 ne muð hafap ne wip monnum spræc
 ne gewit hafað ac gewritu secgað
 þæt seo sy earmost ealra wihta
 15 þara þe æfter gecyrdum cenned wære.
 ne hafað hio sawle ne feorh ac hio sipas sceal
 geond pas wundorworuld wide dreogan.
 ne hafap hio blod ne ban hwæpre bearnum wearð
 geond þisne middangeard mongum to frofre
 20 næfre hio heofonum hran ne to helle mot.
 ac hio sceal wideferh wuldorcynings
 larum lifgan long is to seegeanne
 bu lyre ealdorgesceaft æfter gongeð
 woh wyrdra gesceapu. þæt [is] wrætlíc ping
 25 to gesegeanne soð is æghwylc
 þara þe ymb pas wiht wordum becned
 ne hafað heo ænig lim leofap efne sepeah
 gif þu mæge reselan recene gesegean
 soþum wordum saga hwæt hio hæte.: 7

(現代英語訳)

Writings say that the creature
 is clearly visible among mankind
 at important hours. It has a much greater

peculiar power than men know of.
 5 It will visit every living being separately,
 then it departs again on its travels.
 Next night it will never be there,
 but it must always wander on an exile's path
 homeless, without losing esteem thereby.
 10 It has neither foot nor hand, nor does it ever touch
 the ground,
 nor has it either of the two eyes,
 nor a mouth, nor speech with men,
 nor has it intelligence, but writings say
 that it is the most poorly endowed of all creatures
 15 that were brought forth according to their kinds.
 It has neither soul nor life, yet it shall make jour-
 neys
 far and wide over this wonderful universe.
 It has neither blood nor bones, yet it has become a
 comfort
 to many of the children of men in this world.
 20 It has never reached heaven, nor may it go to hell,
 but it shall always live in accordance with the
 directions
 of the King of glory. It takes long to tell

how its state of existence will continue,
the devious course of its destiny; that is a strange
thing

²⁵ to explain. Each part of what has been indicated
in words with regard to this creature is true;
it has not a single limb, nevertheless it lives.
If you can quickly solve a riddle
correctly, say what it is called.

この様な遊びのテーマとなっていることからこの国でも月は人の関心事であったことは明かであろう。但し心情的には可成り怜悯である。生命なき物体として観察的に克明に記述されているが、それでも旅人として擬人化され、子供らの心に感動を与える馴染み深いものと受取っている。

十世紀と言えば当時は天地の論理はまだ Ptolemy の時代であった。二世紀から十六世紀までのヨーロッパの天文学は総てギリシャの *Almagest* Ptolemy の *magnum opus* を基に構成され、人も教会もそれを堅く信じていた。即ち大地は天体の中心に固定されており、これを廻って幾つかの透明体の板面にそれぞれ固定された太陽、月、惑星や星々の面がそれぞれに廻転していると言う考えである。そして Pythagoras の説によれば一

つの面が廻転するとき他の面と摩擦して発する音が 'the music of the spheres' なのである。これが詩的心象 poetic imagination を作る助けになるのである。この考えは今日に至るまで文学の中の多くの表現に用いられている。Shakespeare にもそれは多く見られるのである。例えば 'the music of the spheres' (*Pericles*, v. i. 231), 'the tuned spheres' (*Ant. & Cleop.* v. ii. 84) また *Hamlet* の中の王が 'The star moves not but in his sphere' (iv. vii. 15) と言っており、星がその固有の sphere 或いは orbs から迷い出た時凶事が起るのだと説明している。またそれぞれの sphere の廻転速度は Ptolemy の構造では皆異っているのだが、Elizabeth 時代ではもうその考えは一般にはやや緩和され、視覚的観察によって大分修整されてきた。しかし同時代の Marlowe の *Doctor Faustus* の中には次の記述も見られる。

Faust. ...Who knows not the double motion of
the planets?

The first is finish'd in a natural day;
The second thus; as Saturn in thirty years,
Jupiter in twelve, Mars in four, the Sun, Venus,
and Mercury in a year, the Moon in twenty-
eight days...But tell me, hath every sphere a

dominion or intelligentia?

Meph. Ay.

Faust. How many heavens or spheres are there?

Meph. Nine; the seven planetes, the firmament, and the empyreal heaven.

Faust. Well, resolve me in this question; why have we not conjunctions, oppositions, aspects, eclipses, all at one time, but in some years we have more, in some less?

Meph. *Per inaequalem motum respectu totius.*

Faust. Well, I am answered.

この *Faust* と *Mephistopheles* の会話は Ptolemy の天文学を当時なりの知識でよく説明している。宇宙の spheres の数を七つの惑星座と恒星の天空、最高天の計九つの天空とし、天体の合、衝、星相、食の不均一な現象はそれぞれの固有の性に係るものと説くのである。周期は二種類あり、一つは大地を軸として二四時間で東から西に廻るが、十二宮の中に於ける周期は皆その属性に従って三〇年、一二年、四年、一年とあり、月は二八日である。これが *Faust* に対する答えとなっている。シェイクスピア (*Shakespeare*) はこの学説を時に用い、大地 'the earth' を 'this centre' (*Troilus*, I. iii. 85) と

言っている。然し勿論一六世紀ともなれば天文学も革命的变化を遂げ、世は Copernicus の学説によって代られた。彼の偉業——*De revolutionibus orbium coelestium* が一五四三年に上梓されたからである。そして Solar system 天文学の基礎がうち立てられた。シェイクスピアは当然その知識をもっており、これに基づく叙述も作品中にはふんだんにある。然し作品には故意に両者を混用しているのである。であるからその両説をわきまえて作品の解釈をする必要がある。

以上一六世紀に於ける月を含む天文学上の知識を踏まえた上で *Shakespeare* の月を扱った二作品を取りあげて行こう。作品の出来たと推定される順序に従って先に *A Midsummer-Night's Dream* の中の月の扱いと意味を探してみる。一五九二年に書かれたと推定されるこのたわいない夢幻劇はそれ故に詩的空想をかきたてられるシェイクスピアの代表作と考えてよい。春の月夜の物語りであり、その構成は現実の世界と妖精の世界及び劇中劇の話の三部の混成によると見ることが出来る。この作ではその何れの部分にも月が扱われている。

Theseus と言うアテネの大公の宮廷の事件がその現実の部分であり話の大枠と見てよい。この現実の領域では冒頭から月が出現している。第一幕第一場の一行から一〇行迄を引用してみる。

Theseus Now, fair Hippolyta, our nuptial hour
Draws on apace; four happy days bring in
Another moon: but, O, methinks, how slow
This old moon wanes! She lingers my desires,
Like to a step-dame or a dowager
Long withering out a young man's revenue.

Hippolyta Four days will quickly steep themselves in night;
Four nights will quickly dream away the time;
And then the moon, like to a silver bow
New-bent in heaven, shall behold the night
Of our solemnities.

(訳)

シイシウス さて あでやかな ヒポリタ姫、われ
等の結婚の時も間近になった。楽しい日があと四
日過ぎれば

新月の宵となる。されど ああ、なんと待ち遠い
ことよ

この古い月の虧けて行くのが、私はもどかしいの
だ。

継母や未亡人がいつまでも生き永らえていて、自
分が相続すべき

財産を萎びさせるのを眺めている若者のように。
ヒポリタ 四つの昼はやがて夜の色に浸されまし
う。四つの夜は夢を見るまに早くも過ぎられまし
う。そしてみ空には新しい白銀の弓張月が、
私共の儀式の宵を照らすことでありましょう。

(土居光知訳 岩波文庫版)

このシイシウスとヒポリタの考えている月は暦の上の
月にすぎないのであるが、月が欠けて新月の生ずる経過
に新婚をひかえた二人のもどかしい心情を托しているの
である。この新月は後の八三行目の「次の新月 (new
moon) が出るまで」と共に暦の上の役割が強い。第二
幕の第一場は妖精の世界である。これは当然夜の空想の
世界である。その7行目に出る月はPtolemyの説にあ
る月であろう。それは最も速い動きの天体である。

Enter a FAIRY at one door and ROBIN GOOD-

FELLOW

[Puck] at another.

Puck. How now, spirit, whither wander you?

Fairy. Over hill, over dale,

Thorough bush, thorough brier,

Over park, over pale,

Thorough flood, thorough fire,
I do wander every where,
Swifter than the moon's sphere;

(訳)

バックと仙女と出遇う。

バック(ロビン) どうだね、仙女さん、どこへ行くの？

仙女 岡を越え、谷を越え、
藪をくぐり、茨をくぐり、
園を越え、囲いを越え、
水をくぐり、火をくぐり、
わたしはさ迷ういづくでも、
空をゆく月よりはやく。

次に何らかの比喩及び構成的比喩を伴った月を拾ってみる。第一幕第一場六五行目の月は下記のようなものである。

The. Either to die the death or to abjure
Forever the society of men.

Therefore, fair Hermia, question your desires;
Know of your youth, examine well your blood,
Whether, if you yield not to your father's
choice,

You can endure the livery of a nun,
For aye to be in shady cloister mew'd,
To live a barren sister all your life,
Chanting faint hymns to the cold fruitless
moon.

(訳)

セイシウス それは死刑になるか、それとも今後永久に

世の人と交わらず巫女になると誓いを立てるからだ。
だから ハミア、お前の胸によく聞いただし、
お前の若い身そらで、お前の情熱で、

——親の選びに従わないとして——

巫女の装束に耐えられるかをとくと考えてごらん。
永久にうす暗い神殿の奥に閉じこめられて、
冷厳な月の女神に奉仕し、か細い声で讃歌を唱え
つつ、

生まず女の生涯を送ることが出来るかを。

(土居光知訳)

ここに出る心象は die, death, livery of a nun, shady cloister mew'd, barren, cold fruitless moon 等の比喩に表現されている。第二幕第一場のタイティニアの台詞は天候不順、作物不作、悪疫流行等の凶事の原因を自分に

帰している。この妖精の王 Oberon の妻 Titania は元来 Diana のことで、月の女神なのである。彼女のこの台詞の中に更に月の神の所行として一〇一行目の言葉を見出すことが出来る。

The.

No night is now with hymn or carol blest :
Therefore the moon, the governess of floods,
Pale in her anger, washes all the air,
That rheumatic diseases do abound :
And thorough this distemperature we see
The seasons alter :

(訳)

タイティニア
夏祭りの夜の唄をうたう人もありません。
それ故に汐の満干を司る、月の女神も、
不機嫌で顔色あおざめ、空気をしめらすれば、
リウマチや風邪が流行して、
時候が狂い、夏が冬に代ったかと思われる程。
.....

(土居光知訳)

この月の女神の心象は *pale in her anger, rheumatic*

disease, distemperature of the seasons などで病態の表現となる。同じ一場の一五四行にも月のイメージがある。

*Obe. That very time I saw, but thou couldst not,
Flying between the cold moon and the earth,
Cupid all arm'd :*

(訳)

オウベロン その時俺は見た——お前にはわからなかったであろうが——
冷たい月と地球との間を飛びめぐって、
キューピッドが弓をひきしぼっていたのを。.....

(土居光知訳)

ここでも月は *cold* のイメージである。

第三幕第一場は森の中の劇中劇の稽古の場面となる。俄役者は町の無教養な職人達である。彼等の演ずる芝居はエリザベス朝の頃よく知られていた *Pyramus* と *Thisby* (バビロンの女王) 劇であり、それは月夜の事件である。であるから月を出さなければならぬ。それを智者のボッタムは暦で調べ、その演出の晩月が出ることを確認する。そして芝居の時大広間の窓の扉を明け、射し込む窓の月を利用しようと提案する。この場の月は暦法上の月にすぎない。ただしこの案は役者が提灯を持っ

て出てそれを演ずることに定まるのである。これは第五幕第一場のシイシウスの宮廷での芝居の本番の為の伏線となっている。この宮殿はシイシウスとヒポリタ姫の結婚の祝いの宴の場であり、芝居はその余興として例のアゼンスの職人達によって行われるのである。この真面目で馬鹿げた人々の演出の故にピラマスとシスビの悲劇も狂言になってしまふ。その月に拘る一三一行の所を次に引用する。

Pro. Gentles, perchance you wonder at this show;

.....

This man, with lime and rough-cast, doth present Wall, that vile Wall, which did these lovers sunder;

And through Wall's chink, poor souls, they are content

To whisper. At the which let no man wonder.

This man, with lantern, dog, and bush of thorn, Presenteth Moonshine; for if you will know, By moonshine did these lovers think no scorn

To meet at Ninus' tomb, there, there to woo.

(訳)

前口上 殿方様、これを御覧じてお驚きかとも存じあげますが、

.....

この石灰と上塗り漆喰を持ちたる男は、壁の役に、

相思の二人を邪魔したる憎き壁であります。

その壁の裂目より、可憐なる二人が囁きかわして、心を慰めたること、御不審なきようお願い奉ります。

この提灯と、犬と、茨の束を持つ男は、

月光の役を勤めます。御存じの如く、

この恋人は、月光をたよりに、ナイナスの墓にて、逢引しつつ恋を語らんと致しました。

(土居光知訳)

劇はこの前口上の説明通りに進行する。シスビがナイナス(ニニイ)の墓を訪れると牛を襲って喰べた血だらけの獅子が現れ、シスビは上衣を脱ぎ捨てて逃げる。ピラマスが現れ獅子は去る。彼はシスビの牛の血の付いた外套を見付け、彼女は喰べられたものと思い、刃物おのが胸にあてる。やがて二九五行で次の台詞となる。

Pro.

Come, tears, confound,

Out, sword, and wound
The pap of Pyramus;
Ay, that left pap,
Where heart doth hop. [*Stabs himself.*]
Thus die I, thus, thus, thus.
Now am I dead,
Now am I fled;
My soul is in the sky.
Tongue lose thy light,
Moon, take thy flight, [*Exit Moonshine.*]
Now die, die, die, die, die. [*Dies.*]

(訳)

ピラマス ………

さあ、涙よ、ええ
出ろ、刀、そして

ピラマスの胸を刺せ。

そう、左の乳を、

その下に心臓が躍っている。(自害する)

こうして俺は死ぬる、こうして、こうして、
こうして。

今俺は死んだ、
魂魄は去った、
魂は空へ。

息よ、光を消せ、
月よ、絶えろ！ (月退場)
只今死ぬ、死、死、死、死。(死ぬ)

(土居光知訳)

獅子から逃げていたシスビが登場し、墓の中に死んで
いるピラマスを見付ける。そして彼女は愁嘆し、ピラマ
スの自害した剣を探すが、見付からず、その鞘で自害す
る。彼女が倒れた所に獅子、月光、壁が再登場し、ニニ
イの墓の前に幕を引くのである。それから月光と壁は
Bergo 風の仮面踊りをし、客達は退場。妖精のバックが
そこに箒をもって登場し次の歌を唄うのである。

Enter Puck.

Puck. Now the hungry [lion] roars,
And the wolf [behows] the moon;

…………

Now it is the time of night
That the graves, all gaping wide,
Every one lets forth his sprite,
In the church-way paths to glide.
And we fairies, that do run
By the triple Hecat's team

From the presence of the sun,
Following darkness like a dream,
Now are frolic. Not a mouse
Shall disturb this hallowed house.

.....

(訳)

バック 今や、腹の空いた獅子がうなり、
狼は月に吠える。

.....

今や、真夜中、

墓場は、皆蓋が開いて、
送り出される亡霊どもが、

お寺道をすべり行く。

そして我々妖精共は、

月の輦を牽く黒白の駒と並んで馳せ、

太陽のそばを避け、

夢のように闇を追う、

今や、楽し、鼠一匹

この浄めた家で騒ぐな。

.....

(土居光知訳)

この triple Hecate とは天空では Luna 又は Cynthia'

地上では Diana' 冥府では Hecate 又は Proserpina となるので triple team なのである。またシスビは鞘で自殺するので、この劇中劇は悲劇であるが、劇全体は喜劇となる、つまり人は誰も死なぬというシェイクスピア喜劇の形式上の工夫である。

この最後の月の荷なう心象は constitutive metaphor に属するもので、明かに月は死を印象付けている。先にも度々引用した cool, cold, pale, disease 等の月の比喻とも合せ考えると、おのずから Shakespeare がこの作品で用いた月の役割が明瞭となるであろう。

これより二、三年あとの一五九五年頃の彼のもう一つの劇 Romeo And Juliet は光の imagery をもって評価されているものであり、従って夢幻的な作として人気が高い。この劇は前の MSND (『真夏の夜の夢』) の劇中劇 Pyramus and Thisby の悲劇と似た筋書きであるが、これは前者と違って正に悲劇である。イタリーの Verona の町の二つの不仲な家柄の息子 Romeo と娘 Juliet の恋から生じた事件が主題である。ここでも MSND ほどではないが幾つか月が扱われている。

第一幕第一場 215 行でロミオが青春の恋の鬱病にとり付かれている所の、彼と友人ベンヴォリオとの会話の箇所に Dian's wit (月の女神の分別 中野好夫訳) とある。これはロミオの前に恋していた女ロザラインの冷理さを

表現した比喩で、第三幕第五場二〇行のロミオとジュリエットの会話に出る *the pale reflex of Cynthia's brow* (月の女神の面からの蒼白い照り返し、中野訳) と同様の扱いである。moon と言う月の一般的な表現ではないことに注意したい。第一幕第四場六二行のロミオの友人マーキュシオとの会話には、夢に現れた妖精の車を牽く虫の比喩として *The collers, of the moonshine's watery beams* (頸輪は濡れた月の光、中野訳) と言う水に関した言葉もある。然しこの作の中で月を moon の語で重要に扱っているのは第二幕第二場の冒頭からである。ここはロミオが己の Montague 家に敵対する Capulet 家の屋敷にその娘ジュリエットを慕って忍び込んだ場面である。この作中の最も文学的と言われる各場面でもある。

[Romeo advances.]

Rom. He jests at scars that never felt a wound.

[Enter JULIET above at her window.]

But soft, what light through yonder window breaks?

It is the east, and Juliet is the sun.

Arise, fair sun, and kill the envious moon,

Who is already sick and pale with grief

That thou, her maid, art far more fair than she.
Be not her maid, since she is envious;
Her vestal livery is but sick and green,
And none but fools do wear it; cast it off.
It is my lady, O, it is my love!
O that she knew she were!

(訳)

ロミオ現わる

ロミオ 傷の痛みを知らぬ奴だけが、他人の傷痕を見て嘲笑う。

ジュリエット、二階舞台の窓に現われる。

シッ! なんだろう、あの向うの窓から射して来る光は?

あれは東、すればさしずつめジュリエット姫は太陽だ。

美しい太陽、さあ昇れ、そして嫉妬深い月を殺してくれ。

月に仕える処女おとめのあなたが、主人よりもはるか美しいそのために、

あの月はもう悲しみに病み、色蒼ざめているのです。

もう月の処女になるのはよして下さい。月は嫉妬深い女神なのだ。

月の処女のお仕着は、病に蒼ざめた緑の色に決まっている。

そんなものを着るのは、道化の阿呆どもの外にはない。

脱いでしまってください。おお、あれこそはわが姫、わが思い人だ！

いや、まだそうと僕の心が通じてくれればいいと思うばかりなのだ！

(中野好夫訳 新潮文庫)

ジュリエットを光に譬えているのである。太陽ではない。その射す方向が東であるから、それでは光源は太陽かな、太陽ならばその立場で月など追いついてくれと言うのが冒頭の意味である。また続いて *thou her maid* とあるが、この *maid* は月神 *Diana* の社に仕える清浄を誓った *Nun* 巫子である。ジュリエットを月よりも美しいと言うための隠喩である。そして月を病んで緑色の顔をした嫉妬深いもの、道化 *fool* に過ぎないと貶している。純潔を現す制服、即ち *her vestal livery* は緑色と言うのは、当時宮廷の *fool* 役は緑と白の斑の服を着ていたことに因んでいる。更に同場の一〇七行にも月が引用されている。

Rom. Lady, by yonder blessed moon I vow,

That tips with silver all these fruit-tree tops—
Jul. O, swear not by the moon, th' inconstant moon,

That monthly changes in her [circled] orb,
Lest that thy love prove likewise variable.

Rom. What shall I swear by?

Jul. Do not swear at all;

Or if thou wilt, swear by thy gracious self,

Which is the god of my idolatry,

And I'll believe thee.

(訳)

ロミオ ジュリエット様、僕は誓言します、見渡すかぎり、

樹々の梢を白銀色に染めているあの美しい月の光にかけて。

ジュリエット ああ、いけませんわ、月にかけて誓ったりなんぞ。一月ごとに、円い形を変えてゆく、あの不実な月、

あんな風に、あなたの愛まで変っては大事だわ。

ロミオ では、何にかけて誓えばいいのです？

ジュリエット 誓言など一切なさらないで。

でも、どうあっても仰言るのなら、ロミオ様御自

身にかけて

誓っていただきたいの。あなたこそ私の神様、

あなたのお言葉なら信じるわ。

(中野好夫訳)

毎月形を変えている月を不実に譬えている。この作品全体にわたって構成は天体と気象上のイメージが支配しているが、月だけはその不吉、不純、死と病にのみ役付けられているのである。Shakespeareの前期のこの二作では月はこの様なイメージの下に現われるのであるが、彼の他の作品ではどうであろうか。また現代文学にも月の心象が重大な役割を荷っている作品を幾つか知っている。折を改めて調べてみる積りである。

筆者の乏しい日本文学の体験では、似たものもあろうが、和歌、俳諧などの月の扱いは多くはもっと崇敬され、抒情的な、親しみ深い感覚をもたされている様な気がするのである。ともあれ具体的にイギリス文学の月と日本のそれとの対比を試みることは予想以上に興味深いテーマであることを知った。蛇足であろうが十三夜の月見講演会としてこのテーマの提案が同じ平塚キャンパスにある理学部からなされたことも、総合大学の意義を感じさせてくれたと言う意味合いで楽しいことであった。

(きたざわ・よしひろ／経営学部教授)